

一般研究・共同研究

マシュー・アーノルドの宗教観
—— *Culture and Anarchy* から
Literature and Dogma への展開——

村 瀬 順 子

他の国々に先がけて産業革命を成し遂げ、いち早く工業国への変身を果たしたイギリスは19世紀ヴィクトリア朝において、世界に冠たる大英帝国として物質的繁栄をほしいままにしたが、その反面、当然のことながらその内部に様々な社会問題や矛盾を抱え込んでいた。それまで社会の実権を握っていた地主階級にとってかわって社会の中核をなすようになった産業ブルジョアジーは、利潤の追求に明け暮れており、労働者として都市へと流入してきた下層階級の人々は貧困の中で不満を募らせていた。功利主義に力をかりた金権主義がもたらす道德の荒廃、下層階級の貧困と過激化という状況の中では、自由主義や民主主義思想の台頭はむしろ社会不安を助長するものであった。そうした道德的荒廃に対処すべく国教会においては福音主義運動が活発化し、ついで、高教会派の復興運動とも言うべきオックスフォード運動がキーブルやニューマンらを中心に熱心に展開され、前世紀には見られなかった宗教的盛り上がりをもたらした。しかし、同時にまた、この時代は科学万能の時代であり、1859年に出版されたダーウィンの『種の起源』(*The Origin of Species*) が「世界を変えた一冊の本」と言われるように、科学的合理主義精神が従来の宗教観を根底から揺るがす、正に変動の時代であった。

マシュー・アーノルドは、このような時代の大きな変動期にあって、時代の流れと傾向を敏感に読み取り、教育者として、モラリストとして、そして何よ

マシュー・アーノルドの宗教観

りも「教養の使徒」として、社会の救済への道を示そうとした19世紀後半の代表的批評家である。ラグビー校の名校長としてパブリックスクールの教育の刷新に務め、また国教会のリベラリストとしてニューマンの論敵であったトマス・アーノルドを父にもつ彼は、ニューマンがオックスフォード運動を押し進めていた時、オックスフォード・ベイリオルカレッジに学びながら、詩作を志していた。彼の詩には、時代の混乱の中で精神的支柱を見失った若者の絶望感・孤独・ノスタルジアが痛切に表現されている。

信仰の海もかつては潮満ち、
幾重にも巻き上げられた輝く帯のように
大地の岸を取り囲んでいた。
だが今はただ
もの憂く、長い引き潮の怒号が
夜風の吐息に合わせて引いて行くのが聞こえるのみ。
この世の果てしなく広い荒涼とした岸辺と
あらわな砂利をさらして。 (ll. 20-3)

アーノルドの有名な 'Dover Beach' の一節である。また 'The Scholar-Gipsy' という詩において、科学的知性の追求の果てにやってくる感性の不毛と神に対する不信にさらされた現代人の苦悩を

病める焦燥、分裂した目的
過重な労働を課された頭と萎えた心をもつ
現代生活のこの奇妙な病 (ll. 203-5)

と呼んでいる。

しかし、やがて彼は詩作から批評へと転向することによって、時代を憂うことから積極的に社会の救済へと踏み出していく。そこには社会の現状に対する並々ならぬ危機感と父親譲りのモラリストとしての使命感があったにちがいない。こうして立ち上がったアーノルドはニューマンに対しては常に尊敬の念を抱きながらもリベラリストとしての立場からニューマンと対立することになる。彼が社会批評において最も重要視したものは、彼が *Zeit-Geist* と呼ぶところの科学的時代精神であり、それを認めたくえでいかにして社会的秩序と安定を回復するかという事であった。従って、元来、懐古的・復古的性格をもつオックスフォード運動の時代精神に逆行する不合理性を受け入れることはできなかった。しかしながら、アーノルドにはニューマンのような宗教的熱狂と魂を揺さぶるような説得力はないものの、イギリスを国教会のもとで真のキリスト教国にするという目的において両者は共通しており、急進的な自由主義者で同時代に活躍した J. S. ミルなどと比較することによってアーノルドの宗教性が明らかになるであろう。アーノルドの批評は文学・社会・政治・宗教と多岐にわたっているが、後期になると宗教に関する批評がほとんどを占めていることからアーノルドの宗教へのこだわりが見られる。この論文においては、*Culture and Anarchy* (『教養と無秩序』、1869年) から *Literature and Dogma* (『文学と教義』、1873年) に至るアーノルドの宗教観の展開を考察してみたい。

当時、各地で頻発していた暴動の中に世相の混乱を見たアーノルドは、*Culture and Anarchy* において、社会の機械化に伴う人心の荒廃に対処するためには内面的な教育が必要であり、国家の真の繁栄は一人一人の精神的な向上にあるとする観点から、社会の腐敗を救う手だてとして 'culture' という独自の概念を提唱している。culture とは、人間の精神のすべての側面を調和的に発展させることによって人間性の完全を目指すことであり、アーノルドはこれ

を 'a study of perfection' と定義している。アーノルドはまた culture の最終目的は「正しい道理と神の意思を広めること」 ('to make right reason and the will of God prevail') としているが、religion ではなく、あえて culture を持ち出したのは人間の完全性に至るには宗教のみでは不十分であると考えたためである。

アーノルドは古代以来、人間の精神活動を支配してきた二大思潮として Hebraism と Hellenism について独自の見解を述べている。Hebraism も Hellenism もともに人間を完全性に近づけることを目指すが、Hebraism は人間の良心に訴えて「服従と正しい行ない」へと導こうとし、Hellenism は人間の知性に訴えて「自発的に正しく考えること」へと導こうとする。キリスト教文化のもとでこれまであまりにも Hebraism にかたよりにすぎた我々は、自ら自発的に考える事をしないで、ただ既成の行動法則に従っているにすぎない。これまでの固定観念や既成観念をもう一度見直して、物事を私心なくあるがままに見ることによってのみ、我々は完全性に近づく事ができる、つまり、Hebraism の偏重によってもたらされた精神のアンバランスを是正するために我々はいまや Hellenism へと向かわなければならないとしている。アーノルドのギリシャ古典への傾倒は彼の詩にも、また文芸批評においても明らかであるが、Hellenism にこそ人間性の美と英知 ('sweetness and light') があり、そのうえに Hebraism のもつ精神の強靱さが加わって初めて人間の調和的發展がもたらされるのだとアーノルドは主張している。そして、彼は特に非国教会派のプロテスタントに対して彼らの宗教的熱狂がもたらす偏狭さを厳しく批判している。

また、Hebraism においては神に対する信仰と従順が「唯一の必要なるもの」 ('the one thing needful') であるという考え方が基本になっている。面白いことに当時アーノルドに先駆けて社会批判の急先鋒に立ったカーライルなどは

教会や教義や sacrament などは単なる空虚な形骸に過ぎないとする点でニューマンとは真っ向から対立したが、にもかかわらず信仰を「唯一の必要なもの」とする点においてはニューマンと同様、揺るがなかった。それに対してアーノルドはそうした考え方そのものが人間の完全性への努力をむしろ阻むものであるとする。

最高を目指すという義務から人間を解放できるような「唯一なるもの」などは存在しない。…「唯一の必要なもの」という考え方や我々自身の充分かつ調和的発展に対する軽視が我々の思考や行動にどれほど悪影響を与えてきたことか。 (5:180-1)

アーノルドは既成の religion ではなく、culture という新しい概念の中に社会の改善策を求めた。そこに個々の人間の中にある 'higher self' あるいは 'best self' を目覚めさせて「正しい道理」('right reason') へと導こうとするモラリストとしての姿勢が表われている。アーノルドはうわべばかりの教養しか持たない上流階級を 'Barbarians' と呼び、機械を信奉し、自己満足と俗物根性に満ちた中産階級を 'Philistines'、教育もなく、貧困と汚濁の中に生きている下層の労働者階級を 'Populace' と呼んだが、どの階級も国家の指導者たるにふさわしいとは思えなかった。特に急速に勢力を増してきた労働者階級にいかに対処するかが最も差し迫った問題でもあった。

自由主義思想の氾濫の中でフランス革命の轍を踏まないためには、何よりも国民の教育と国家が拠って立つべきなんらかの権威 (authority) を確立しなければならないとする立場をとったのはアーノルドだけではない。しかし、それをどこに求めるかという点になると、カーライルはその権威の基礎を歴史上の英雄にならった「真の貴族階級」('true Aristocracy') に求め、ニューマン

は「使徒の継承者」としての国教会に求めた。それに対してアーノルドは各階級のなかに僅かながらも人間性の向上に関心を持ち、自らの‘best self’を見いだそうとする人たちが存在するであろうという確信のもとに、それらの人達の努力を支え、奨励できる外的な権威を確立すべきであると考えた。つまり、culture によって引き出され、高められた個々人の‘best self’の集合体として組織された国家(State)を形成し、それに最高の権威を与えることによって個々人の一層の向上を奨励しようというわけである。このような国家は一種の理想であって、それをどのような形で具体化していくかという政治的視点が欠落していると言わざるを得ないが、アーノルドとしてはモラリストとしての立場から、むしろ理想を高く掲げることによって人々の俗物根性を正そうとしたのであろう。しかし、人間性の中に‘best self’ (又は‘higher self’) と‘ordinary self’ (又は‘animality’) を認め、culture を通じて‘best self’ を高めることによって絶対的真理に至ることができるという考えは基本的にキリスト教的な考えかたであって、例えば当時、自由主義思想の先頭に立った J. S. ミルなどと比べるとアーノルドの保守性がよくわかる。ミルにとって最も重要なものは個人の自由であり、国家の発展は個々人の自発的な、しかも責任ある活動にかかっており、国家権力は個人を保護するための最小限のところにとどめるべきであるとする。ミルは、教育ですら国家の介入すべき問題ではなく、能力のある個人に任せるべきであるとその『自由論』(On Liberty, 1859) の中で述べている。さらに、ミルは絶対的な真理は有り得ず、人は自由にそれぞれの意見をぶつけ合うことによってよりよい真理に達することができるのみだと主張する。こうした考え方こそ、アーノルドが無神論(Atheism)と呼び、社会を無秩序へと陥れるものとして激しく非難したものであった。The Popular Education of France において彼は次のように述べている。

国家の偉大さとは単にそれを構成する個々人が自由で活動的であるということによるのではなく、それらすべての人々の自由や活動が個人だけのものよりもっと高い理想のために用いられる時にこそ、その国家は偉大なのである。 (2:18)

そして、アーノルドにとって国家の究極の理想とは「正しい道理と神の意思」を知り、それを広めることに他ならなかったのである。Basil Willey がアーノルドを‘conservative reforming intellect of nineteenth-century England’ (19世紀イギリスの保守改革的知性) (274) と呼んだように、アーノルドは新旧両時代の価値観の狭間において時代の科学的合理精神を受け入れ、かつ旧来のキリスト教に根ざしたモラルを守ろうとした。そこから religion にかわる culture という概念を掲げたのであるが、*Culture and Anarchy* から4年後に書かれた *Literature and Dogma* はアーノルドにとってキリスト教というものが結局のところいかに重要なものであったかを証明するものとなっている。以下、この書物について考察を行ないたい。

Literature and Dogma においてアーノルドは時代精神と聖書という問題に真っ正面から取り組んでいる。当時、ドイツにおいては聖書の歴史学的な研究、いわゆる高等批評 (Higher Criticism) が盛んであり、そうした科学的知識の追求による科学的懐疑がイギリスにおいても知識階級を襲っていた。しかし、その一方で一般の宗教界においては、そうした時代の趨勢に対処することなく、旧態依然とした非科学的な「予言」や「奇跡」を信仰の基盤とし、あるいはまた不毛な教条主義 (dogmatism) に固執していた。*Literature and Dogma* におけるアーノルドの眼目は、科学の攻撃によっても揺らぐことのない信仰の基盤を聖書の中に見いだすことにあった。

聖書の解釈におけるアーノルドの独自性は聖書を文学としてとらえるという

点にある。聖書のことばは科学的なことばではなく、むしろ人間によって書かれた文学的なことばであり、人間の意識では十分に理解することのできない対象としての神に向けられた、隠喩に満ちたことばであるとアーノルドは考える。従って、聖書のことばを科学的に、あるいは字義どおりに解釈することの愚を指摘し、神学や抽象的議論を廃し、これまで人間がどのような方法で思考し、どのようにしてそれを表現してきたかについての洞察力を駆使することによって、聖書を人間学的に解釈していこうとする。

そもそもイスラエルの人々の神に対する信仰は、人間を越えたところにある、正義を司る永遠の力への直感と道徳的体験に基づくものであった。しかしながら、イスラエルが衰微していくなかで、しだいに神への直感は失われ、宗教が形式主義に墮していく一方で、逆にイスラエルを再興すべきメシヤの到来に対する期待をふくらませていった。それをアーノルドは *Aberglaube* または 'extra-belief' と呼んでいる。つまり、根拠のない、証明出来ないことに対する信仰である。予言も奇跡も現実には起こらなかったのであり、全て *Aberglaube* であるとアーノルドは判断する。超自然的な奇跡を否定するという点では理神論と共通しているが、アーノルドは *Aberglaube* が生じてきた経緯やそれが人々の神への信仰をつなぎとめるのになにに役立ってきたかという点をも考慮している。そして、そうしたメシヤに対する期待感が高まっている中で現れてきたのが、イエス・キリストである。イエスは当然のことながら、*Aberglaube* の氾濫の中でイスラエルの人たちが期待した人物像とは程遠かったが、形式主義に陥っていた宗教に感情を吹き込み、真の正義を取り戻すという仕事を唯一可能な形で見事に果たしたという意味において正に真のメシヤであるとした上で、アーノルドは新約聖書の解釈へと入っていく。ここでまずアーノルドはイエスの使徒を含む新約聖書の著者たちがイエス・キリストを語る際に全く過ちを犯さず、真実のみを述べていると考えるのは間違っている、という考

えかたを打ち出している。彼らは感覚や感情においては優れていたかも知れないが、知性においてはごく普通の人間であり、彼らよりはるかに偉大であったイエスのことばの全てを十分に理解していたとは考えられないとして、聖書の細部にわたって、それがイエスによって本当に語られたことばであるか、それともイエスに対する誤った期待や迷信に陥っていた著者が、その未熟さ故に作り上げたものであるかを鋭く分析していく。すると当時の人間には到底考えつかなかったであろう高次元の教えが期せずして織り込まれていることがわかる。それこそがイエスの真の言葉である。例えば、イエスは「神の王国は汝らの中にある」と語っているが、これらは神の王国が現実を訪れることを信じていた当時の人々の口からは決して出て来なかったことばである。このようにしてイエス・キリストの教えを辿っていくことによってイエスの偉大さが一層浮かび上がってくる。イエスは正義や救済について即物的にしかとらえられず、Aberglaubeの中に浸りきっていた人々に真の正義・真の救いとは外から与えられるものではなく、自らの内部にあるのだという教えを説いた。人々の目を内面へと向かわせ、自己を捨て去ることによって永遠の生命にはいることができるのだという教えを説くことによって、人間の内面的な変革の必要性を示したところにイエスの偉大さがあるのだとアーノルドは述べている。「汝を捨て、日々、十字架を背負ってわたしに従うがよい。自分の生命を愛する者はそれを失ない、この世における自分の生命を憎む者は永遠の生命に至るまでそれを得るであろう。」(Luke ix, 23) というイエスの教えをアーノルドは necrosis (dying) と呼んでいる。つまり、死ぬことによって生きるのである。イエスは生と死を即物的にではなく、内的なものとしてとらえている。自己放棄とは、低俗ではかない自己を捨てて、イエスを通してより高尚な自己に目覚めることである。イエスはそうすることが真に生きる、永遠に生きるということであり、そこにおいてこそ生きる喜びと心の平安が存するのだと説いた。ここで私達は

Culture and Anarchy においてアーノルドが言うところの 'higher self' と 'ordinary self' の概念がイエスの教えに発していることがわかるであろう。イエスの教えは神学者たちが語るような難解極まりない、あるいは疑似科学的な教義などではなく、個々の人間が内面において道徳的体験として実感できるような、単純でしかも実践することの極めて難しい教義であった。アーノルドはまたイエスの教えは個々の人間に向けられたものであり、教会はイエスにとっても使徒たちにとっても元来副次的なものに過ぎなかったとしている。

しかしながら、このイエス・キリストに対しても様々な Aberglaube が加えられる。そして、人々は時代とともに自らの内部へと目を向けることを説いたイエスの教えから離れていき、逆にイエスの復活や最後の審判、この世の終末といった、イエスのことばを内面においてとらえず、即物的に解釈することから生ずる誤った Aberglaube をますます拡大していった揚げ句に、キリスト教の基礎をそうした Aberglaube に置くようになってしまった。そしてその Aberglaube が科学的時代精神 Zeit-Geist によってもはや受け入れられなくなった今、人々はあたかもキリスト教の全てが否定されたかのように信仰から遠ざかっていく。そうした事態を避けるためにはキリスト教の本質——イエスの教え——に立ち戻らなければならない。そのことによってキリスト教は失なうもの以上に多くのものを得る事ができるのだとアーノルドは主張している。

アーノルドは、宗教の目的は実践にあるとし、道徳的体験による実感——わかりやすく言えば、自己のうちにある 'higher self' に従って行ないをすることによって得られる生の充足感——の中に科学によって揺らぐことのない信仰の基盤を見いだそうとしたのだと言えるだろう。このように単純化してしまうとアーノルドの主張は宗教性を剥ぎ取った単なるモラルに過ぎないように見えるが、そうではない。アーノルドは *Literature and Dogma* の第一章において道徳と宗教の違いについて、宗教は「感情によって高められた道徳」 ('morality

touched by emotion') であるとしている。そして、その感情の源は自らの教えを身をもって示したイエス・キリストに対する献身的な愛情であり、そこからイエスの実践を模倣したいという願望が生ずるのだとしている。

このように *Literature and Dogma* において、religion への傾倒ぶりを見せたアーノルドはその結論の中で、もちろん religion だけではなく、culture も science も art も人間の完全性を目指す上で重要であると断ってはいるが、*Culture and Anarchy* において前面に打ち出された culture がここでは影をひそめてしまったことは否定できない。「哲学と神学において彼（アーノルド）は undergraduate であり、宗教に関しては Philistine であった」（105）と後に T.S. エリオットから批判を受けることになるが、この後書かれた多くの宗教に関する著作はアーノルドが彼独自の方法ではあれ、ますますキリスト教へと傾倒していったことを示している。そして、アーノルドと同時代のジョージ・エリオットが、神に対する懐疑の果てに神の属性を人間性の中に求める人間宗教（Religion of Humanity）に唯一の救いを見いだそうとし、社会的連帯を強調した¹²ことと考え合わせる時、時代の変動期にあって社会的良心を必死になって守り抜こうとした 'Conservative Reformer' たちの苦悩を見るような思いがする。しかし、アーノルドにとってはやはりキリスト教の伝統とその価値観は何物にも代えがたい精神的基盤であった。

引証資料

1. Arnold, Matthew. *Complete Prose Works of Matthew Arnold*. Ed. R. H. Super. 11vols. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1960–77.
2. _____. *The Poems of Matthew Arnold*. Ed. Kenneth Allott. 2nd ed. by Miriam Allott. Longman Annotated English Poets. London: Longman, 1979.
3. Eliot, T. S. *The Use of Poetry and the Use of Criticism*. 1933. London: Faber and Faber, 1975.
4. Willey, Basil. *Nineteenth-Century Studies: Coleridge to Matthew Arnold*. 1949. Pen-

マシュー・アーノルドの宗教観

guin Books, 1973.

5. John Stuart Mill: *Utilitarianism, On Liberty, Essay on Bentham*. Ed. Mary Warnock. Glasgow: William Collins Sons & Co. Ltd, 1975.